

文教温故

乾

番外書冊

和書門類			
一六六	三三八	二一九	一六六
冊	架	函	號

63

內閣文庫			
一六六	三三八	二一九	一六六
冊	架	函	號

傳家一三

31

內閣文庫			
番號	和	16638	
冊數	2 (1)		
函號	190	63	

190-63

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 cm

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

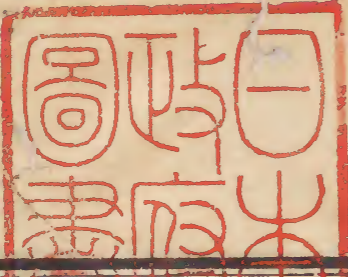
G Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



子
孫
心
友

100-99



文教温故自序

夫非攷古則不能泝源非博洽則不能知古未有
一味作美膳片音調妙曲者也故道備文武學兼
和漢洞通古今商確彼此而後可與言學矣蓋文
教之要切在於此濟世利物固其所也然時有盛
衰世有否泰泰則顯諸事業否則形諸文字古之
學者亦皆如此不然則雖竭三餘之晷窮四部之
籍而沒世無所用也謹按古史
應神之朝百濟來貢始傳經典自是以來聖化

淺草文庫

Handwritten calligraphy in a vertical column, likely a signature or title.

盛闡儒風大振文教郁郁英才蔚起其後通信隋
唐朝廷制度一遵唐禮於是彼文學終自爲吾
文學矣故曰非攷古則不能泝源非博洽則不能
知古此之謂也是以擇其所當知者彙而錄之名
曰文教溫故以便童蒙今也舉其一隅而已雖然
讀者詳焉則八珍之美八音之妙庶乎窺其崖略
矣文政十一年歲次戊子春正月山崎美成識

文教溫故目次

第一文學

學規 六文大小經

四道儒

律令格式

武備 爛脫

折桂

燈油料

程朱學

新舊二義

第二學校

釋奠 文宣王

第三經籍

始傳經典

五經

十三經

老莊爲經

四書

孝經

讀書始用孝經或十字文

孟子非經

佚書存吾邦

書冊

第四訓點

點圖

遠古止點

法家點圖

御書始調進點圖角筆

訓點

朱墨兩點

返點

須互假名

濁點

朱引

第五讀法

經傳古訓

名目

漢音吳音

對馬音

第六文字

上古無文字

新字

和字

省字

偏旁之稱

假名

片假名

伊呂波

伊呂波終書京字

以難波津淺香山二歌為

書學始

假名書之用意

蘆手歌繪

第七文章

平出闕字

闕畫

年號

和文

假名遣

書翰

第八詩賦

詩賦起原

詩話

詩會

聯句

掩韻

第九和歌

和歌

抄物

制詞

連歌

和漢聯句

第十印板

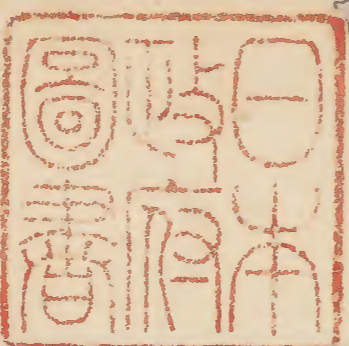
古刻多佛經

儒書

始刻醫書

活字版

目次終



文教温故卷之上

文學

江戸 山崎美成著



學令曰凡學生在學各以長幼為序初入學皆行束脩之禮於其師各布一端皆有酒食其分束脩三分入博士二分入助教凡經周易尚書周禮儀禮禮記毛詩春秋左氏傳各為一經孝經論語學者兼習之凡教授正業周易鄭玄王弼註尚書孔安國鄭玄註三禮毛詩鄭玄註左傳服虔杜預註孝經孔安國鄭玄註論語鄭玄何晏註義解云謂非是一人兼習二

家或鄭或王習其_一註若有兼通者既是為博達也
これより後延曆十七年三月十六日官符曰應_下以春
秋公羊穀梁二傳各為_一經教授學生事右得_式部
省解_傳按學令云教授正業左傳服虔杜預註者上
件二傳弃而不取是以古來學者未習其業而以去
寶龜七年遣唐使明經請益直講博士正六位上伊
舉部連家守讀習還來仍以延曆三年申官始令家
守講授三傳雖然未有_下符難輒為例自此厥後二
三學生有受其業即以彼傳冀預_{出身}今省欲試恐
違令條將_從抑止還惜業絕竊檢唐令詩書易三禮

三傳各為_一經廣立學官望請上件二傳各準小經
永聽講授以弘學業仍請官裁者太納言從三位神
王宣奉勅依請_{集學令}これぞ古昔の學規ありたるか
詳ぬを令式等の書を見てこころ得べし

學令曰凡禮記左傳各為_一大經毛詩周禮儀禮各為
中經周易尚書各為_一小經通_二一經者大經内通_一一經
小經内通_一一經若中經即併通_二兩經其通_三三經者大
經中經小經各通_一一經通_五經者大經並通_二孝經論
語須兼通_{とあり}とありとあり經と大中小と分つこと唐書
選舉志に見えり全く唐比制めく卷帙の多少よれる

文苑英華 卷一百一十一

の別義ありふりて明の陸深云唐制以禮記春秋左氏傳爲大經詩周禮儀禮爲中經易尚書春秋公穀傳爲小經當是以簡帙繁簡爲次第爾燕間錄

天長元年八月二十日官符曰緬尋古典歷覽前王勞於求賢逸於經國伏望諸氏子孫咸下大學寮令習讀經史學業足用量才授職者宜五位已上子孫年二十已下者咸下大學寮類聚格職原鈔曰大學寮者四道儒士出身之處和漢最爲重職紀傳明經明法算道謂之四道又曰凡四道儒者第一等秀才第二等明經第三等明法第四等算道也秀才ハ紀傳の儒をとり神

皇正統記曰古一ハ詩書禮樂をもちて國を治る四術とす本朝ハ四術の學をたくらふことあたらずあれど紀傳明經明法の三道ハ詩書禮を攝もなきふこと算道を加へく四道とゆひ代々小用ひきもその職を執りしことあれハ委しきあるにあつては見えし四道の學紀傳道を第一と明經道ハこれなほくや後中々文章博士ハ從五位下の官明經博士ハ正六位下の官ありしことを見ても吾邦古來より史學を先とせしむることあり古ゆりも君子以多識前言往行周易といへり振古治否の顛末を詳し

せんこと其功尤モ史學小在六史日本書紀、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄○この中々日本後紀の「書」を「や」に「絶」たり今寫本ゆく傳りるものハ偽書ありよつと鴨祐之舊史の亡逸を惜み日本逸史を編輯して其闕を補ふ近來温古堂ゆく日本後紀十卷を校刊せられど後紀の真本ハあり絶く久しき古史の再世ハあり三鏡水鏡、大鏡、増鏡を始め殘缺といふももて以て嘉賞せざる一として野史家乘もまて少く其文の巧拙を論せば事實を研究し治亂の由を討論せしめて古今の時世を論ぜん神皇正統記を始とせざる讀史餘論、保建大記等の書を讀てその概略を知るる博聞廣覽有見識且久經歷世變者可以是非於古今廢乎寡過苟見聞寡陋涉世亦淺而無見識者未可以

議天下古今之善惡也慎思如記誦文辭之學恥一字之不穩一物之不知者恥非其恥而恥心亡矣所謂孽孽奪宗認賊爲子之弊也天民遺言古來より學問を博洽を貴ぶといへども考據精確の條貫なき其弊乖誤龐雜に至らざるを得ず又讀書ハ精細を要とすたれども稗官諸家ハ博覽あるが其弊孤陋寡聞の誦をよぬれ難し博文約禮こそあるまほしけれ昔よりまて學問といはた漢學の如く吾邦の古へのことを殊小學ぶるハ無き博識といふ人ハ只漢籍のちりれことをよく知るるのちりれ吾邦の典故を



うとく味うるしゆ多ふ年月を及く古言古意ハ漸お
うせゆらつせよこれと知る人もあくなれるありされ
ども猶な和學わがくといふ一家の學ハあつてゐる儒生の兼通
せしやめて世々の日本紀講筵こうたんめとるな其時の宿儒
博達の人ハ任せられしあつて別わか和學を專業とせし
人ありといふことも聞えは世人の近きを捨く遠きを
ととめ目を賤め耳を貴ぶこと人情の習ひとていへ
ども吾邦の史學をバ必講究こうきゅうせし凡國體こくたいハ關係
せるところはもの印度の佛説和蘭の曆法の如きも
敢て廢やめせしむるにまこと傍窺ぼうさうありしと初學の

急務きゅうむふあり

唐之刑書有四曰律令格式令者尊卑貴賤之等數
國家之制度也格者百官有司之所常行之事也式
者其所常守之法也凡邦國之政必從事於此三者
其有所違及人之爲惡而入于罪戾者一斷た以律りつ書しよ
刑法吾邦古昔專唐制たうせい遵したがひようく復律令格式の
撰せんあり弘仁格序曰律以懲肅ちやうさう爲宗令以勸誠こんじやう爲本
格則量時立制式則補闕拾遺四者相須足以垂た範はん
類聚令式れいしよいま猶な存ぞんせりと式五十卷全ぜんく存ぞんす令十卷
今倉庫醫疾いぢやくの二篇にへんを佚いぢす
律格りつかくハ二書にしよをあく亡逸むじやくすといへども殘ざん缺けつ纔ざん存ぞんす

律十卷今四篇類聚三代格三十卷今六卷を存せりこれ以て文明比美政を伺ふべし法家の書金玉掌中抄裁判至要抄法曹至要抄等あり及び貞永式目建武式目比類少く初學の士宜しく講習せむ

有文事者必有武備有武事者必有文備孔子家語文武ハ表裏の如く偏廢せざれば續日本紀和銅五年九月己丑太政官議奏曰建國辟疆武功所貴設官撫民文教所崇まると神皇正統記曰坐して以て以て道を論ぜりハ文士の道なり此道不明らざるは相とせ侍にたんとり征て功を立つるハ武人のことあり此こと小

譽れあはるる將とせりまゝなりさをも文武の二ツをあはらるるも捨たまふべし世亂れし時ハ武を右に文を左にす國治まれる時ハ文を右に武を左にせしむり宋の陳亮云文武之道一也後世始岐而爲二文士專於武夫事於劍楯彼此相笑求以相勝天下無事則文士勝有事則武夫勝各有所長時有所用豈二者卒不可合耶吾以謂文非於武也必於武非於文也必有料敵之智才智所在一焉而已龍川文集むく大江匡房卿義家朝臣ハ兵法を授け義家朝臣もまると武人ゆして其教をうけられし

古今著聞集曰義家朝臣十二年合戦の後宇治殿へ
参りて戦此間の物語やるを匡房卿より聞く
器量のかゝる武者あれども猶軍の道をたぬ
獨りてふしをれざるを義家の郎等聞てけり
のこまぬ人なると思ひし程に江帥出られぬ
やがて義家も出たるは郎等かゝる事をその
はもとと語らるればさぞめでたき事なり
のられざるをりて會釋せしむるやがて
弟子となりてそれより常はまらぬ學問せり
永保の合戦此時金澤の城を責ぐるは一行の
雁飛

川田の面おわりんとりて俄は地をりきり
とどろく飛歸るを將軍あやしくをせしむ
先年江帥の教たまへるより夫軍野は伏せ
つとやがる此野はかゝる敵ありたべり
まらぬ下知せられれば手をもちて三方を
時わんのとやかく三百餘騎をかゝりて
みとあひひく戦ふとわづらひされども
ぬるこゝあれば將軍此軍勝は乗らぬ武
是のころ江帥の一言ありてあつて武を
講ト武

人よまてて文を學べとて自、聖言の旨趣よこのあつこを
 仰慕せむとて、
 讀書のあつこハ必、師傳よよとせられがあつこにあつこを爛
 脱傳受るといふとありとて江談抄曰、史記爛脱ハ
 只三卷也本紀第一、後漢書ニ廿八將論也といふ
 史漢をいふかよまん、經傳もさるてあつくと
 思へり、金澤本羣書治要の裏書ハ爛脱の二説あり
 先讀經元年一更返讀傳惠公元妃孟子至隱公立
 而奉之次讀傳元年春王周正月以下云云故定安
 説也信俊真人説云、此説可奇序云、故傳或先

經以始事或後經終義正義之先經者若隱公不書
 即位先發仲子歸于我衛州吁殺其君定先發莊公
 娶于齊如此之類是先經也云云註無其意正義又
 如此以之知此説非矣予又不傳此説耳これあつその
 大概を知て、吾邦此史も又亂脱あり釋日本紀
 亂脱の條曰、第一亦曰、葉木國野尊亦曰、見野尊師
 説見野尊之次可讀葉木國云、亂脱是也或又直
 讀之とて、按むると爛脱と云ハ錯簡のこ、ハ聞ゆ
 こと今あり、いふと、其委、ハ知べく、
 只古昔かるとありと好古の士ハ辨へて、

云猶喜故人新折桂自憐羈客尚飄蓬其後以月中有桂故又謂之月桂月中又有蟾因以登科為登蟾宮用却說事固已可笑而展轉相訛復爾文士沿襲味之思也天祿識餘あひまふ唐世已折桂の字ある時ハ吾邦の學士もまゝ彼邦の稱よまゝとあへり

歌林拾葉集は月の桂の攀ぐことと折と云たことあり及第一難きことといひていひがことあれども唐世已は月桂此謬りあれは其來ることいひて天滿宮故實は月の桂を折とハ及第一なる人ゆゑ桂の枝を賜ふ故なりといふを據もなき妄説なり

桂林遺芳抄といふ古書あり學問料より始め入學吉書進士課試等のことと記せりことまゝ却說が故吏よあはるる書名あはるべし

大學寮の書生は學文科を給ふとあり應和二年四月廿五日請課試文章得業生狀曰右雅材等二代儒胤一時俊才天曆十年共給學問料天德元年同補得業生味道之志門塵雖芳揚庭之望家風未扇伏尋延喜新制秀才課試之期以滿七年為限延喜未歲已來亦有相准之法以給料之二年當秀才之一年藤原經臣給料勞四年秀才勞五年被許登省是其始也類聚符宣抄あひまふ是を燈油料といひ又といひ火此のいふことより延喜大學寮式曰凡諸博士學生等計宿給燈湯料錢あはる續世繼物語曰長久四

年の三月ゆも佐國孝言時綱國綱あどいふものども
 試せせたまひき弓場殿あど作て奉りたるもや
 桂を折たる博士とのどもまごころぬ者ハ燈の望あん
 ありたる句毎ハ唐の博士の名あど置るれば作らぬあ
 人難くあんありたる千載和歌集ハ大江匡範ハ學文
 料ゆをべりたるをたまひ侍りたる人ハ訪へる
 かへりてふよまてつらつら歌あひやと十夜ああぬ
 とりびのうげかひも心あつと
 程朱の學世ハ行つてハ惺窩藤先生より始ると如く
 あどいふあく玄惠法印ぞ喙矢ありたる尺素往來曰

清中兩家之儒傳師說候侍讀歟傳註及疏並正義
 者前後漢晉唐朝博士所釋古來雖用之近代獨清
 軒玄惠法印宋朝濂洛之義為正開講席於朝廷以
 來程朱二公之新釋可為肝心候也程朱學を
 朝廷ゆも聞しりされし始あるべし國朝諫諍録引長
 信ハ勢州垂水人也後醍醐帝登祚之初入京勤仕於
 省中上諫疏奏不報廣信便去歸於勢州與妻子耕
 于垂水帝徵不至時正中元年也初廣信在京常與
 藤房論學一日語藤房曰宋大儒朱晦庵之書前此
 六年始入本邦世儒未有知焉我幸得之深尊信之
 請今借之宜單思於斯書藤房諾然藤房之學雅混
 儒佛以故卒與廣信不合懶齋云見其曰方得晦庵
 之書始入本邦以尊信之則廣信是今日讀朱註者
 之師祖乎尤可以仰慕焉あく此事甚と疑ふべしあ

文淵閣

十一

兵家茶話曰、玄信とのみ盲人あり諸家の系圖を記憶して
 望、ゆまうせ妄作し、この時二山彌三郎義長といふ人あり始ハ
 陽明の説をとと後程朱の説を歸して其名高きり、玄信より
 彼、人のゆまうせ不行き諸家の事をも物語り侍り、義長が
 妻ハ垂水某の女、あてあり、垂見氏ハ伊勢の國司よ仕へ、
 者といひ傳へ、これども書つて、このあてれ、いふ、采地を
 考へ、中葉伊勢ハ垂水河内守廣信といふ人あり、朱註の四書を
 信トく万里小路藤房卿よ奉る後、嘉文亂記を述作し、たゞ、
 其事跡ハ長濟草といふ書ハ詳々候記憶し侍れ、誦聞せ、
 らせん、と書よ向ひ、あて、かく、少の、と、あり、全篇讀み侍れ、
 義長感ト入、今ひと通り讀た、手書し侍らんと、い、玄信諾と
 よむと一字の誤、なく手書し、稱美甚、秘、人、見せ、
 京都の藤井頼齋と義長同ト學流、あれ、或時彼長濟草を書
 寫し、贈る藤井氏諫諍錄述作の、と、長濟草を引く、垂水
 廣信を載せ、云、垂水河内守廣信といふ人、實錄雜記、
 わつ、あ、人、く、玄信が偽作の長濟草を實記と見、書、
 して、天下は行、ゆ、い、一人、虚を傳、い、と、天下悉く虚を
 傳、い、と、あり、蓋しこの謂哉、い、實、此説の吉野先主之
 如く、い、と、い、妄誕無稽辨を待、い、知、い、

時獨清軒律使始唱、程朱之義、近至于惺窩藤先生
 講學教授、興斯學於既絶、濂洛關閩之學至此始盛、
 後之學者孰不受其賜、本朝、源朝、こゝろ、次で羅山先生此
 程朱の學風を唱へられ、海内靡然と、風に
 嚮ふ、それより後、此學派いと多うれ、その源を惺窩
 羅山の二先生あり、その學派の、い、い、
 傳統の委しきこと、斯文源流一卷、河、遠、撰、先、あり、あつ、
 こゝろ記さす、

今古學朱子學の稱あり昔ハ新舊二義といひ僧義
 堂が日工集曰、康曆三年九月廿二日余以事謁上

府府君出接余云々昨日儒學者講孟子書其義各不同如何余曰所見不同也近世儒書有新舊二義程朱等新義也宋朝以來儒學者皆參吾禪宗一分發明心地故註書與章句迥然別矣廿五日又見問儒學新舊二學不同如何曰漢以來及唐儒者皆拘章句者也宋儒乃理性達故釋義太高其故何則皆以參吾禪也尚直編曰晦庵註書惟毛詩一經及註并諸製作皆用佛法汎以佛經禪語改頭換面翻變其語而取其意如是用者逼於羣書之見れば吾邦の縉流のそあふ唐土のそあふ朱子參禪の説はそより有らん

學校

善相公意見封事曰伏見古記朝家之立大學也始於太寶年中本朝文粹卷之六懐風藻序曰及至淡海先帝之受命也恢開帝業弘闡皇猷道搭乾坤功光宇宙既而以爲調風化俗莫尚於文潤德光身孰先於學爰則建庠序徵茂才定五禮興百度憲章法則規模弘達曩古以來未之有也日本書紀曰天武天皇四年春正月丙午朔大學寮諸學生云々云々の文小よる時ハ學校の設く已ハ天智天武の朝ハあまのつひとも令續紀及び武智麻呂家傳等の書を按づるハ太寶年中ハ至る初め何事も盛ふのうと

完備せしむるを以て武智麻呂家傳曰大寶四年三月拜爲大學助先從淨御原天皇晏駕國家繁事百姓多役兼屬車駕移藤原京人皆念忙代不好學由此學校凌遲生徒流散雖有其職无可奈何公入學校視其空寂以爲夫學校者賢才之所聚王化之所宗也理國理家皆賴聖教盡忠盡孝率由茲道今學者散亡儒風不扇此非所以抑揚聖道翼贊王化也卽共長官良虞王陳請遂招碩學講說經史浹辰之間庠序鬱起遠近學者雲集星列諷誦之聲洋洋盈耳慶雲三年七月徙爲大學頭公屢入學官聚

集儒生吟詠詩書披玩禮易揄揚學校訓導子衿文學之徒各勤其業和銅元年三月遷圖書頭兼侍從公朝侍內裏披候綸言爰以其間檢校圖書經籍先從壬申年亂離已來官書或卷軸零落或部帙欠少公爰奏請尋訪民間寫取滿足由此官書髣髴得備抑み小此公なりしやせむあどろ斯道の衰へば今日は至ることを得へんや實ふ孔氏の功臣やとて搢紳の師表とも謂つべし
學校の治道は切あること今さういふべしあはれ
後世猶道を重んず治を求むるの明王これ設を欠

たゞこゝろに今^ノ京とありても大學寮の制度完備
 せり弘法大師の綜藝種智院見續性靈抄檀林皇
 後の學館院見文德實錄と始り藤氏比勸學院見類聚
 貞觀十四年十一月十七日官符源氏の辨學院見西宮記和氣氏の
 弘文院見拾芥抄管家の文章院見朝野羣載何れも
 盛んありしと世換り風移り次第に廢滅し中間數
 百年の兵戈の跡もなくなりたるは寔に惜むべし
 學校の衰へし世の衰へる基とあるは是れ其時の
 人の治道よからかりしこと亦知るべし國家の柱石なる
 人豈心をこらふ留めざるべけんや

學令曰凡^レ大學國學每年春秋二仲之月上丁釋奠
 於先聖孔宣父其饌酒明衣所須並用官物義解云
 謂釋菜也奠奠幣也祀其先聖以示敬道宣父是
 孔子謚也謚法施而不有曰宣也亦有儀注の委記
 より西宮記北山抄等の書も見えたり
 釋奠を行はしむる始を續日本紀曰文武天皇太寶
 元年二月丁巳釋奠と見えり此後元正天皇養老
 四年二月乙酉造釋奠器聖武天皇天平二十年七
 月癸卯改定釋奠服器及儀式稱德天皇神護景雲
 元年二月丁亥辛大學釋奠これら續紀に載るところを

とて其のあ次第よその禮及び器物も備りしごとく
あれども光仁天皇寶龜六年十月壬戌眞備公の傳
神護二年任中納言俄轉大納言拜右大臣授從二
位先是大學釋奠其儀未備大臣依替禮典器物始
修禮容可觀とあれ此時あぞ實は完備せりとい見
えし意見封事は始於太寶年中至天平之代右
大臣吉備朝臣恢弘道藝親自傳授即令學生四百
人習五經三史明法算術音韻籀篆等六道とてふ
併せねしべしとされど中間をめぐり廢絶せしめ後
拾遺往生傳曰亭子親王諱恒貞者淳和天皇第三

子也奏曰皇太子當釋奠禮大學是舊儀也此禮久
廢未知所以也天皇曰昔天平末大臣吉備眞吉備
勸高野天皇幸大學行此禮其後八十餘年廢而不
行今太子心存興復甚以佳也即敕皇太子率百官
奠二季のりば亭子親王こそ此禮は於て實は繼絶
興廢の功ありといふべし後國史は待記をとり
ろといふく此禮の絶えざるをいふく三代實錄曰
貞觀二年十二月八日新修釋奠式頒下七道諸國
と見え菅家文章小仁和二年正月十六日任讚
岐守られしとて州廟釋奠有感の詩あり一趨一拜

意如泥蹲俎蕭疎禮用迷曉漏春風三獻後若非供
祀定兒啼とて高倉院安元三年釋奠於太政官廳
行之依太學寮炎上也今按此以後太學寮不建故
歷於太政官廳行釋奠後花園院康正元年八月十
四日丁巳釋奠今按康正以後有長祿寛正之亂繼
有應仁文明之太變洛中爲焦土朝政悉廢釋奠亦
絶兩朝時令あつとも慕京集の二月の釋菜金澤文庫やく
行ゆり三好日向守勝元の許よりゆるとされりことを
隣家梅花とりし題を聖供よとてつり侍るとて
そめれやよ友垣の近きふ遠きもあつとも梅乃下風や

見そつともハその頃静あつとも世中ゆくたれく釋菜
行つとも事此いとめづりともあつとも近く江戸昌平
坂の聖廟に於て再び釋奠の禮行つともより今に至る
儀制まづ備つとも實は文運の至隆ゆへに教
化の淵源とていつのまじき
新葉和歌集の妙光寺内大臣の年中行事三百六十
首の中は釋奠をよめる歌かゝる人のむづかしげとつ
きて仰ぐは高き秋のよれ月年中行事歌合の二位中將
四辻善の釋奠をよめる唐びとれかゝるうげとつ
とめゆつとも時とつとも

續日本紀曰稱德天皇神護景雲二年七月辛丑太
學助教正六位上膳臣大丘言大丘天平勝寶四年
隨使入唐聞先聖之遺風覽膠庠之餘烈國子監有
兩門題曰文宣王廟時有國子學生程賢告大丘曰
今主上大崇儒範追改爲王鳳德之微于今至矣然
准舊典猶稱前號誠恐乖崇德之情失致敬之理大
丘庸闇聞斯行諸敢陳管見以請明斷敕號文宣王
と見えり按魯哀公誅夫子曰宣尼父蓋當時列國
大夫謚必配字曰武伯平仲之類故哀公曰爾自是
而降封贈之典沿革不一至唐玄宗時始封王爵曰

文宣王粟田真人之聘唐適在其時故大丘聞而奏
之朝此本朝天子稱王之始也本朝專遵唐禮只當
稱文宣王不必可從宋元明之制也蓋錄

經籍

古事記應神記曰百濟國主照古王以牡馬壹足牝
馬壹足付阿知吉師以貢上此阿知吉師者亦貢上
橫刀及大鏡又科賜百濟國若有賢人者貢上故受
命以貢上人名和邇吉師即論語十卷千字文一卷
并十一卷付是人即貢進此和邇吉師者經傳此
史見之始也文學の行つてもまゝ此時也

あぐき日本紀竟宴哥橘直幹王仁をよめる
 和多津見野千倍野四羅奈身古江天活曾八島乃
 國爾布箕波都太不禮あぐ濫觴抄曰應神十五年
 甲辰百濟國始獻書籍文字又云八月百濟貢良馬
 二尺典經諸物博士等
 五經博士の名日本書紀繼體紀六年見えり古
 者以易書詩禮樂春秋為六經至秦焚書樂經亡今
 以易詩書禮春秋為五經初學記吾邦あぐいこれ小異
 なるものあり釋日本紀曰五經禮書樂書論語孝經
 尚書也上謂之五經加兵書為六經まゝ家法倭點

曰六經者五經加孝經也といへり

異制庭訓往來曰元正天皇靈龜二年吉備大臣率
 六藝達者一百餘人入唐習五經十三經諸子百家
 及諸伎藝聖武天皇天平七年歸朝と見ゆされ吉備
 公の文學小功あるとハ古書に往載とくも十三經傳來の
 とかつて見えられ其説の是非ハ詳あぐぬと吾邦は十
 三經の名を傳ふるといは久しき證とハ志一拾芥抄曰
 毛詩尚書禮記周易左傳已上謂之五經周禮儀禮公羊傳
 穀梁傳已上加之論語孝經老子莊子已上加之及
 撮壤集聖鬪贊に載るものこれと異あるといは老莊の

二書をとりて經傳とせしことこれよく分明ありあるふ
藤貞幹が古來老莊の二書を經傳に加ふことなり
好録といふもの深く替へざるに謬なり運歩色葉集
中の經書の目と載せり老子經二卷莊子廿二卷
已上經家書とも見えたり漢籍中の微ともいふもの
あり唐の陸德明が經典釋文に老莊の音義ありと
孟子なり老子本子書漢景時始改為經焦氏唐の筆乘
至りて令弘文崇文國子生季一朝參及注老子道
德經成詔天下家藏其書貢舉人減尚書論語策而
加試老子唐書選ふと見えり經家あると疑ふべ

明の顧炎武云宋時程朱諸大儒出始取禮記中之
大學中庸及進孟子以配論語謂之四書本朝因之
而十三經之名始立録知これよるとも十三經の
名ハ明に始まり如く聞ゆれども吾邦をめぐるとの目を
傳ふることもある時ハ唐土中も必後世のよハあつた
ると思ひしるふ已ハ石室十三經孟蜀所鐫故周
易後書廣政十四年歲次辛亥五月二十日唯三傳
至皇祐初方畢故公羊傳後書大宋皇祐元年歲次
己丑九月辛卯朔十五日己巳工畢周易孫逢吉書
尚書周德正書毛詩張昭文書周禮孫羽吉書儀禮

張昭文書禮記張昭文書春秋經傳公穀不題書人論語爾雅張德釗書考經孟子不題書人玉海宋の周密云寥羣玉欲開手節十三經註疏姚氏註戰國策註坡詩皆未及入梓而國事異矣癸辛雜識後集めくあゝく十三經及び註疏の名さへ見ゆれば況や其目も猶もやく既よりありきと知るべし顧炎武が本朝より始まるといふとの千慮の一失とやいふ事四書の名吾邦めくあゝく見ゆるハ日工集康曆三年九月廿三日條より四書盡於朱晦庵庵及弟以太惠書一巻爲理性學本云云康富記嘉吉二年十二

月十三日は是日室町殿孝經被遊終云々此後四書可被遊之大學可有御始之由被申之後小松院被遊四書之間如此云々卧雲日件録寶徳元年閏十月三日條より竺華曰吾翁大椿菴紫人也少年東遊就常州師學四書五經あじ見えり始りて船來せハ何きの時あり日野弘資卿手録より四書ハ正嘉の頃始めく渡りて見ゆ好古録ともいひまゝ元應元年十月四書集註始來南山編ともいひて明の顧炎武が宋時釋朱諸大儒出始取禮記中之大學中庸及進孟子以配論語謂之四書といくと中庸の單行

已レハレ也レ晋ニあり中庸雜出戴記ニ至テ一程始ニ尊信而表章之今獨行與六經並ニ按晋戴顓嘗傳中庸後梁武帝亦為中庸講疏中庸之傳久矣非但始於宋也千年百也康富記曰中庸註事以本經為家說不被執新註之由事仁安比有大外記賴殿奧書件年當淳熙己酉也朱熹新註未渡時節也自然相叶道理奇特之到也とありの和漢同轍と云べ後世中庸を重しめれしとハ園大曆康永三年十月廿一日條又傳聞今日上皇御幸菽原殿資明卿隆職卿行親朝臣已下依召參仕有禮記中庸御談議釋圓月自歷譜曰觀應元年三月下利根止一庵夏藤谷素一素璞問中庸を見えかり孟子を經ともしても唐の揚縮の始也

あらく宋ニありびされど方今和漢のゆえ朱學の専ら行はるる益しるる胚胎をもとめりん

續日本紀曰天平寶字元年四月辛巳古者治民安國必以孝理百行之本莫先於茲宜令天下家藏孝經一本精勤誦習倍加發按むるる唐の玄宗天寶三載十二月詔天下家藏孝經唐書本紀よりあれば吾邦もかるるると聞たまひく號令ありと見えるる其相去るる二十年の満ちは是もく孝道を弘めたまられし一端なり制度あり三代實錄曰貞觀二十年十月十六日壬辰制哲王之訓以孝為基夫子之言窮性盡

理卽知一卷孝經十八章章六籍之根源百王之模
範也然此間學令孔鄭二註爲教授正業厥其學徒
相沿盛行於世者安國之註劉炫之義也今按大唐
玄宗開元十年撰御註孝經作新疏三卷以爲世傳
鄭註比其所註餘義理專非又替之鄭志康成不註
孝經安國之本梁亂而亡今之所傳出自劉炫事義
紛薈誦習尤艱靡厭衆止更招疑義故玄宗廣酌儒
流深廻睿想爲之訓註冀闡微言卽勅學士儒官僉
議可否於是當時有識碩德名儒咸集廟堂恭尋聖
義妙理甚深常情難測同共嗟伏服請頒傳侍中安

陽縣男乾曜等奏曰天文昭爛洞合幽微望卽流行
佇光來葉制曰可然則孔鄭之註並廢於時御註之
經獨行於世而唯傳彼註未讀件經假之通論未爲
允慥鄭孔二註卽謂非真御註一本理當遵行宜自
今以後立於學官教授此經以充試業庶革前儒必
固之失遵先主至要之源但去聖久遠學不厭博若
猶敦孔註有心講誦兼聽試用莫令失望かゝる詔旨
あれハ吾邦古來より御註を用ゝるを故實と凡
學令の文を按ぢむるふ孝經孔鄭の二註當時全く存
せり今世に傳はるるところ卽當時存する所の本なり

孔註ハ太宰春臺已ニ校刻セリ鄭註ハ羣書治要ニ載
せるもの是あり近來尾藩の學士これを表出しく世ニ
傳ふ世ニ讚岐の良芸之裔然の遺本を得たりと云刻せる
ところの鄭註ありと云明の許朝宗が偽造ありし
又清の趙起蛟集解ニ鄭氏曰と稱せるものも二書とも唐
亦御註の文なりと云りありひまじりべくす
土へ渡しくは彼邦ありし殊ニ貴重しく清の鮑廷博が
知不足齋叢書中古文孝經孔氏傳第一集ニ収めり
孝經鄭註第廿一集ニ収めり
刻しく船來せり

天子の御讀書始あま必づ孝經を用ひたまへり三代
實錄曰貞觀二年二月十日辛卯從五位下行大學
博士春日朝臣雄繼以孝經奉授天皇續世繼物語

曰宮の御あまを必づ式部大輔たうちるときこえり
ちうせ御註孝經との六書をしへたてまつりてく人
さねまと尚復とくそれも御師ありとあり武家
あまもまく孝經を用ひらくことを吾妻鏡建仁四
年正月十二日將軍家御讀書孝經始相模權守為
御侍讀あま元久三年正月十二日今日將軍家御
讀書始相模權守仲業末帶為御侍讀時剋持參御
註孝經こもくいづれも御註を用ひらくと蓋し貞
觀の詔詞よあるものあるべし又千字文をも用ひたまへ
ことのわり三代實錄曰貞觀十七年四月廿三日皇

文藝海故 卷上

太子始讀千字文扶桑略記曰淨藏僅及四歲讀千字文ふと見ゆ千字文ハ己ノ古事記ニ見えて論語とゆふ吾邦ニ流傳せむと最ふとて世ゆと重く用ひられしとあるうの物語樓上榮華物語卷玉臺など古書往くよその名見えたり
學令太學寮式並ニ孟子の書か其書ゆと經家ゆとざるをともくなり唐時孟子之書儕於諸子不得列於大小經之數故陸德明經典釋文有老莊而遺孟子金石萃編石已ノ唐の魏徵が羣書治要ニ孟子を刻十一ノ經條諸子の始ニ置り吾邦專ニ唐經傳ニ列ねど

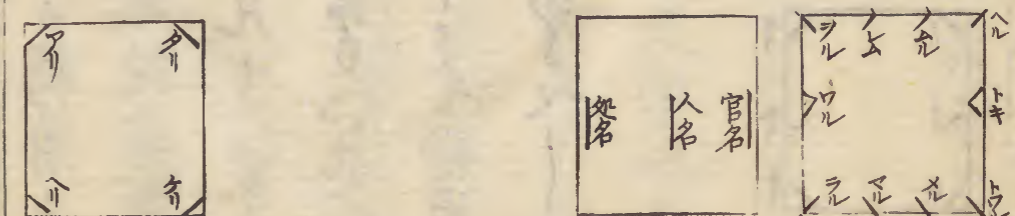
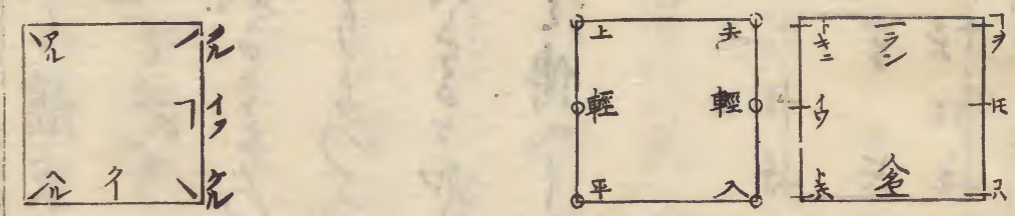
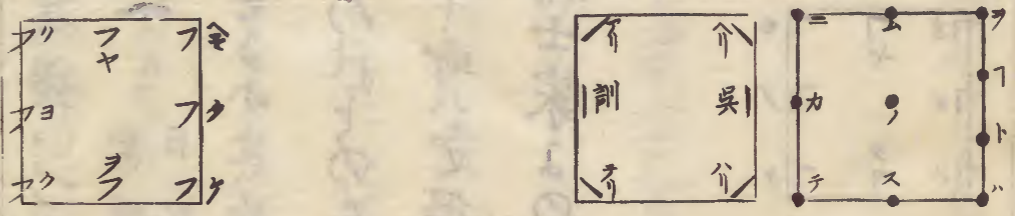
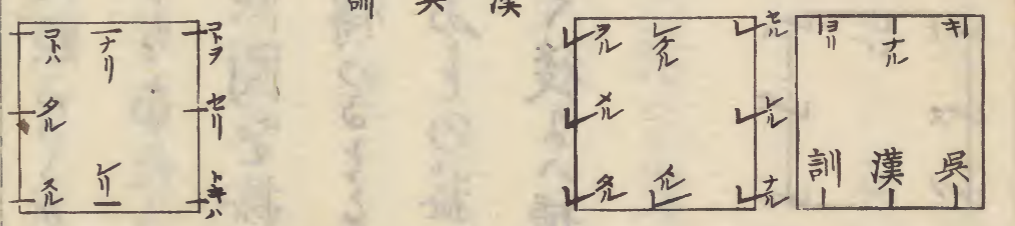
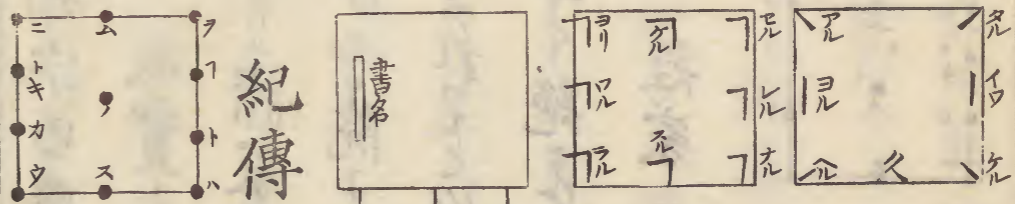
制ニ遵ふ孟子を經ニ收めざるハこの故あり孟子を經とせしむる唐の楊綰その嚆矢あり唐書選舉志曰寶應二年禮部侍郎楊綰上疏言云云論語孝經孟子兼爲一經餘叢考曰孟子書漢以來雜於諸子中少尊崇者自唐楊綰始請以論語孝經孟子兼爲一經未行韓昌黎又推崇之其後皮日休請立孟子爲一學科其表略云聖人之道不異乎經之降不異乎史之降不異乎子之降不異乎也捨是而子者皆聖人賊也請廢莊老之書以孟子爲主有能通其義者其科選同明經則宋人之尊孟子其端發於揚綰韓愈其說暢於日休也按むる皮日休が表は莊老の書を廢し孟子を主とせんといふハ老莊の經家ある一證と併せ見ざるべきなり
應麟が始めたるべき玉海○古經解鈎沈序曰唐宋書自孟子入丙部玉海始列在
九吾邦中葉ニ至りてもなや施行の書ニあはれ卧雲

文藝海故 卷上

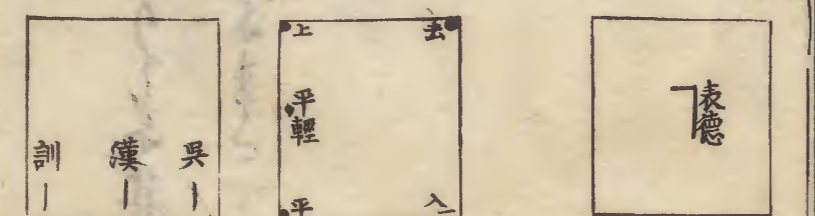
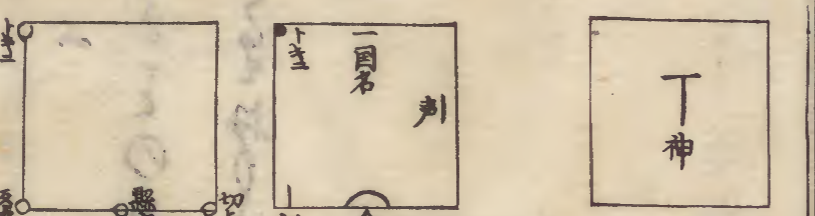
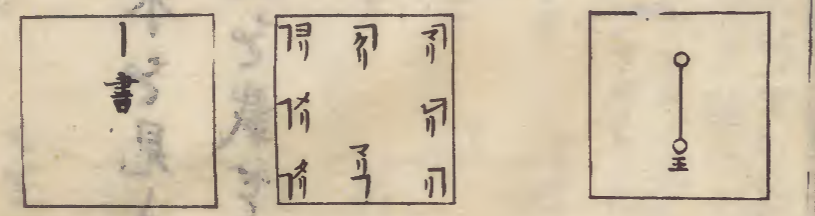
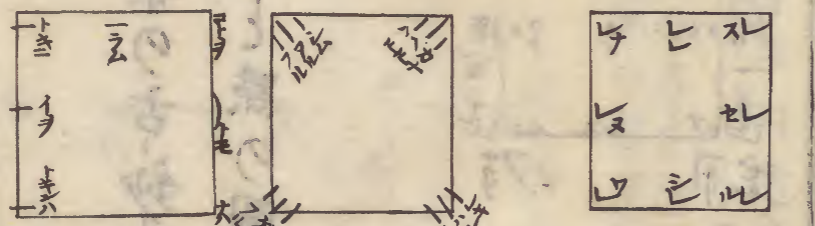
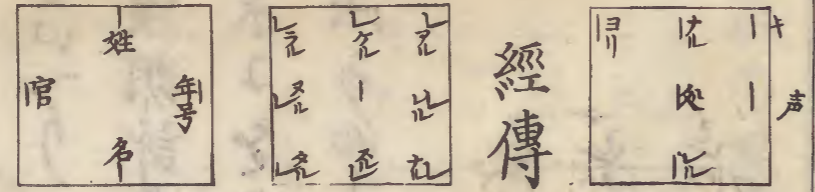
日件録文安五年五月五日條云吾朝用漢土書必
 有朝廷施行之命如孟子則未施行之書也然其
 少也唐土ゆく吾邦のいともいとも四書則重論語學
 庸而惡孟子武備志凡中國經書皆以重價購之獨無
 孟子云有携其書往者舟輒覆溺此亦一奇事也五雜俎
 組らるるの事と異邦傳聞の妄謬をいより辨を
 待ずといふも吾邦古昔孟子を重んぜざる此一證
 とちとるなり

經籍の彼は佚しく此は存するもの少くは彼邦の史
 云其國多有中國典籍裔然之來復得孝經一卷越

王孝經新義第十五卷皆金縷紅羅襪水晶爲軸
 孝經即鄭氏註者越土者乃唐太宗子越王貞新義
 者記室參軍任希古等撰也宋史近來已佚存叢書
 ありりく彼邦ゆくも已不徐福行時書未焚逸書
 百篇今尚存歐陽文忠公全集日本刀歌などの亦宜ありけり
 佛典殊多し神皇正統記曰唐國より經教
 多く失ぬ道遠より四代はあられる義寂といふ人まで
 唯觀心を傳へる宗儀をあらはるるもたえよるあり
 吳越の忠懿王北宗の弟とありぬるをたぐきし使
 者十人をとらり我朝はゆかり教典をゆかりしむ



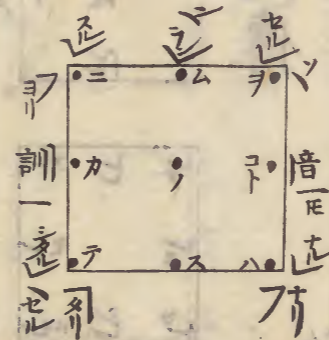
經傳



右の點圖城をこと點とし、右の傍を上より直
讀せられバヲコトトハとあり、をふりてをこと點とし

なることありともやあること俗稱あるべし或ハをこと
 點といふもの論語よとづきく作り出せり南留
 とのりり
 別志

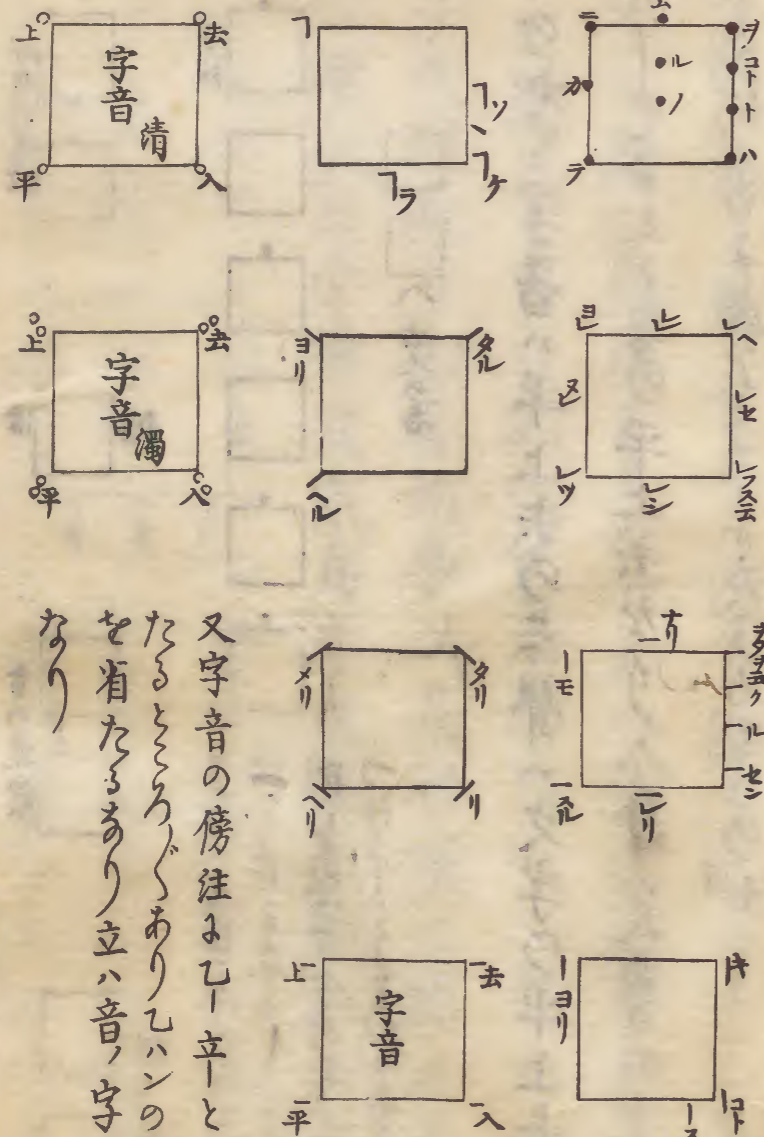
和漢朗詠集の古鈔本を見しことありし其本の
 卷末よをこと點の圖を載せしをゆりあまこと種此
 點法あり



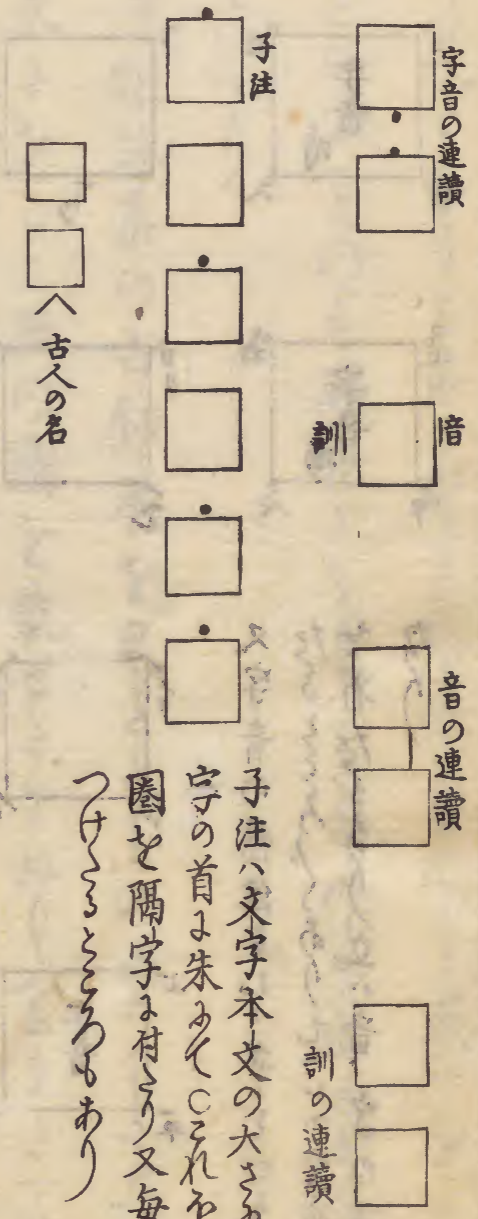
法家の點圖

辛酉隨筆曰今の校合よあぐりり頃古本どよ
 其後律式あどの古本を見しことありし
 同トこれバ法家の點一例ありしん

辛酉隨筆曰今の校合よあぐりり頃古本どよ
 つけし點を勘へあせし點圖をばしりり

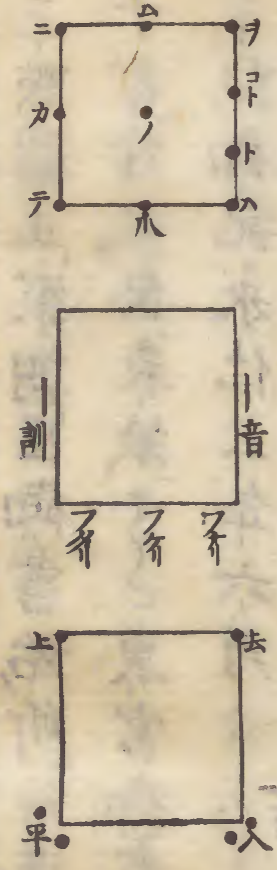


又字音の傍注よし一辛とわきと付
 たるとしりりありしハンの字のオ
 を省たるあり立ハ音、字の省文
 なり



かくの如く字音ハ平上去の三聲ハ文字の平上去ハ構らばいへばよむるの平上去なりハ入聲ハ入聲の文字ありすごとく何書ハ聲をさしたるもかくの如く
 朝廷ゆく御書始の時ハ博士家より點圖と角筆をと調進せらるるなり江家次第御書始條曰寛和例畫

御座西間供纒綱端帖一枚爲御座其前立御書案置御註孝經卷紙也又置點圖角筆等案面推紙とて點圖ハ前ハ載るところのものと異あるところあり其
 中たぐ三圖を註進せらるるなりかつ聊異同もあまは左
 一二を載す中右記曰寛治元年十二月廿四日寅
 今日未刻許有御書始事以式部權大輔正家朝臣爲侍讀以左少辨敦宗爲尚復其儀如式云云



件、三點圖正家朝臣御書始、所注進也。以白色紙、小作子書付之、無表紙、よと東宮御書始、部類記曰、後深草院御記永仁二年六月廿五日、此日皇太子御讀書始也。云云。點圖角筆等、此、兩物學士資宗所調進也。點圖、白色紙書之、料紙、三帳也。一枚、左方、草紙、寸法、高弘各五寸、角筆、長六寸。

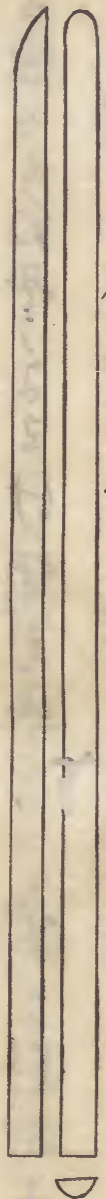


此寸分各方寸也

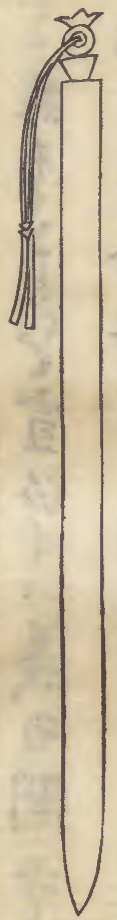
點圖と同く調進、もるところの角筆といふものを、今俗に云字指或ハ字つきのともあり、博士家授入、句讀管

原氏削象牙如筆上琢小浮圖鑿孔繫細條謂之角筆、清原氏用竹、長短小大皆有定制、以指點經籍俗字沙、所謂代指也。三柳軒雜識曰、塊玉如筍名、代指講筵進講時、以點顯經籍、漢遺物日執苑、管家清家との制同、トク〜ハ、おりの角筆といふ名よるところを、蓋し象牙をともく造るるもの古制あるべし。

清原家調進



菅家字指



鳳^ラ點^ス文集^ニ汗^ニ竹^ニ割^テ雞^ヲ居^ニ武^ニ城^ニ若^ニ用^テ父^ノ功^ヲ應^ニ賞^ス子^ヲ老^ニ榮^ニ
欲^ス擬^テ昔^ノ桓^ニ榮^ニさて後^ノ世^ノもをこと點^ハ朱^ノ少^ク付^テ訓^讀歸^ス
點^ハ墨^ノ少^ク左右^ニ付^ルこれと朱^ノ墨^ノ兩^ノ點^ヲを加^ヘるより
逍^遙院^内府^ノ真^跡御^註孝^經ノ奥^書右^件本^端
一^ノ兩^枚有^點予^覓他^本加^朱墨^兩點^了于^時天^文第^三
三^六月^十六^日凌^炎蒸^終功^了都^督郎^公條^とあり
又^或記^ハ足^利庠^主寒^松吾^妻鏡^ノ誤^字を正^シ並^ニ
朱^墨兩^點を加^ヘるより見^えるより當^時博^士家^ノ朱^墨
墨^兩點^を付^ル書^を見^ル往^ルことあり訓^讀を傍^記
記^スるよりハをこと點^ハ無^用のものと似^レれども猶^存と

まてざるハ告^朔の餼^羊あもたるとのべー
返^點ハもとし^字ありむうハかりぐね點^とり桂^菴和^尚
尚^家法^倭點^曰かりぐみの點^のとつうやも本^字の點^畫は
まぎれぬやうは左^よもせく點^どあり二^字三^字乃至^五
六^字までも下^{より}讀^ミこのせバ可^用雁^金也^安齋^云
かり點^レ如此^今ハ付^るを古^き寫^本ハ如此^付
あり是^をかりぐね點^{とい}日^茶蔓^{これ}ハ形^狀まづとこれ
あき俗^稱と見^ゆ或^ハ十^幹數^字天^地上^下等^ノ字^とを
つとを大^歸といふ博^物これハ殊^ニ近^キ俗^稱あり
大^須本^將門^記ハ承^德三^年ノ古^鈔本^{あり}その書^に

切點返點をさしたり。□。切點返點かくの如くある一たり已に載る

經傳の點圖ゆも見えこれれこれれと點法あるべし

經典の文字の傍に訓讀のため小假名を付るを捨假

名と云ハ非ありまけ假名といふべし訓の動用を助るあり

たふハ始の字に傍にメと付けルと付らるれ類ひなき

土佐の人ハあり假名といふ訓の後へは付らる意あるべし

日蔭蔓まゝとてと點絶てすくが起ともいひまてり

付ることハ文明の頃よりあると云はるるよりありあつた

あつたといふこと非ありそのよりハ朱墨兩點あれば並び

行れしと分明あり又大須本將門記にせし假名あれば

をやく已にこれあることありん

文字の四隅に濁點を付ることハ法家の點圖ゆも已に

見えくゆと連聲をあるとありんがたあり補忘記曰本

濁新濁者本濁者字體本濁字也是時横指謂大乘

等也新濁者依音便新濁宗く習濁字也是豎指謂

蓮華等也らうは宗くとあるハ宗旨あり古昔ハ經傳歴史

及び百家に至りてもさか此濁點を加へ記をてあるふ

讀法絶く後點法も亦絶く今ハ佛典にのみ残る

朱引とて地名ハ字の右に單畫一國名ハ字の右に

雙畫一人名ハ字の中ハ單畫一官名ハ字に左ハ

單畫一書名中を字の中は雙畫一年號は八字比
左は雙畫すころも又點法の變なり其歌は右所
中ハ人名左官中二ハ書名左二ハ年號 和讀
要領

如管朱引左年號右官位中書籍之名

如針朱引左物名右名所中故人之名

按ずるは點圖は官名人名處名等ゆを單畫書名は
雙畫を引くとのあれば來處なりといふべし
唐土の中抹側抹むらふなりといふ點法あり

讀法

古一へ言靈能佐吉播布國 萬葉集 ともいふはもと其

尚ぶとろ言詞ありて文字音韻等の學ハ相尚ぶ

とろはあ 東雅 ければ其言語の萬國ハ勝るて足

ぬとろは靈妙あるをとりてありきと故に言辭のいひ

やう書籍のよきとぬといふも自ら優美ゆき聞人の心

ゆといふよく志むるが吾邦の風俗あれは言語の

道を重んぜらるるありされば書籍も古昔ハ讀法を

いと嚴はせられありよきと紀傳明法各その家の讀

法あり其一斑を窺ふべきものハ清家訓點の論語は

古刻本今希に存す 論語考異提要曰國訓本ハ者傍
施國訓傳云又出清家といふもの

是な流布の道春點といふ經傳の訓點ハ羅山先生の

つけられしあり羅山先生ハ惺窩先生の門人あり惺窩先生ハ公家の人なると博士家ハ傳へしと云ふ此訓點を受らる門人へも授けたまひしありと云ふこれ道春點ハ古訓の殘りたるものまじりゆゑなるあり其外音と訓と一様なるごとく兩點ハ讀とと昔木學寮めく諸生ハ教授せし時の讀法ありこれ音訓を一度ハ覺えさせんが爲あり舳艦訓訓點函筭あれば主客混トて意の顛倒を生じ或ハ名目ハあざむくことあり名目よまじりあるまじきと云ふを名目よまじりなどあり書を解すや文を作すやと害損いと多きをか

さて經典の古訓ハ益あること少くは今その一二をいふ古歌のうらさびうらさびなどよめうらさびさびあどいふ義なりそれを浦ゆも又ハ衣のうらさびいひうけたるものありも詩の古點ハ不屬于毛不離于裏とよめるは意つと萬葉集ハ心りと云ふこといふなりと云ふことよめるとよめると併せく僧契冲講ト云ふ年山竹取物語ハ一人ハ逢給へ此ハ幾人もある中めくいづもよめられ一人と云へるも其餘の人ハ對へる云へり云々今世の心めて思へば一人ハ一人毎と云ふ如く聞ゆれども然ハ非す又かゝる禮記曲禮ハ二名

不偏諱と云ふ二名とハ二字の名をとりこハ二字の名の中あり上字はまれ下字はまれ離るる一字を諱すと云ふ事あり偏をヒトツくと訓ふ古言の例はよく當る事なり古事記傳猶この類は多かり推して知るべし

顛倒の讀と文義を害せしむ説あれども國體は味きが故あり唐土の人ハ四聲を以て義を通じ此四聲吾邦の之り點とことハ大よかりども其功ハ全く同ト吾國も四聲を以て猶木より魚を求む如く全く其益あり藝苑已に聖人も魯は居るを逢

腋の衣を衣宋は居る章甫の冠を冠したるのやあはれ其國は居る豈其俗は從はざる事を得べらんや

大く奈良の頃をどまてハより付の名稱あるも字音なご唱ふる事ハありき漢籍をよむもよまらざるハ訓はよき事ハ字音はよむ事ハやしめく字音の物名あるも常言ハありけり才をガエ芭蕉をバセヲ襖をアヲ筆策をヒチリキ雙六をスグロク博士をハカセ消息をセウソコ朱雀をスサカあど吾邦の言詞は近く轉トて呼たりき然るも中昔より漸ふ

字音のゆききとを覺えざるありてハ是を嫌はざるのこゝろ
 らず吾邦の詞よと音便とありての出来く字音の
 如くいひおはる多し古事記傳とて古昔讀法はる
 べきをいふ江談抄曰東行西行雲渺く二月三月
 日遅く菅家後集讀樂天此詩及後代菅家人室家
 令尋北野令詠之間天神令教テ曰トガマニユキカウ
 ガマニユキクモハルバルキサラギヤヨヒヒウラウラト可
 詠云云まゝ東見記曰採菊東籬下悠然見南山東
 寺開山聖國師點をを見て古昔詩を誦するのやうを
 想像せよ

名目鈔序曰夫於我朝稱名目多不當音訓又相交
 清濁故不口傳輒不可呼之無口傳而呼之必失法
 自古至今家々説く雖區分能學之深思之非無一
 義矣といへりかく名自ハ讀法を考へざれば容易くよと
 難し書名あつても周禮檀弓公羊傳山海經など此
 如く人名あつて孔子隋煬帝鄭玄孔穎達などの如く
 これ博士家々傳ふところの讀法ありたりし又忌諱を
 避て呼ばハ牙笏の笏ハ音コツなると骨と同音あると
 避てゲシヤクといひ曲禮ハコクライとよむとを黒癩と
 同音あれバ病名をいふとキヨクライといふが如き此類も

少くは延喜式は神宮の忌詞を載るとして其來れる
ことありしと云ふべし

古くは音博士あり持統紀職負令等に見えり言
語を重んぜらるること知るべし音は吳音漢音あり吳
音ハ吾邦あるく傳ふるところの音あり其證ハ古事
記の假名や吳音のそと取らざり漢音を取らば書紀
ゆゑ吳音漢音をまじへ用ひたり後漢音の正しきを
とて漢音を習ふこと敷あり日本紀略曰延曆十
一年閏十一月辛丑敕明經之徒不可習音發聲誦
讀既致訛謬孰習漢音と見ゆかく漢音の行ひ

和漢音習音之間疑
脱吳字

より後古くは傳へしと吳音とハつるを
吳音ハ吳國の音と

いふことあり吳ハハと荆蠻の地ゆゑ其音韻錯舛多しとて世は儒書ハ漢音を用ひ

佛典ゆゑ吳音を用ひしもの古きありと見えたり

對馬貢銀記ハ日域經論より吳音を用ひしあり

あはれと類聚國史曰延曆十二年夏四月己酉朔丙

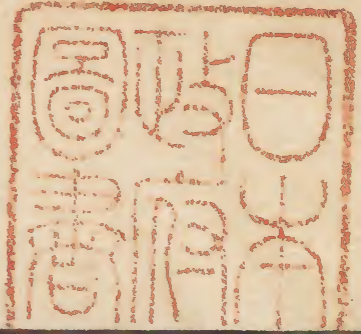
子制自今以後年分度者非習漢音勿令得度とある

よあるとて佛典も亦吳音ハ讀むこと定めあり

とて明かり

吳音ありし對馬音と對馬貢銀記曰此島有

比丘尼以吳音傳之因茲日域經論皆用此音故謂



之對馬音トまゝ江家次第除自條曰敕許之後大臣
 召參議一人註云對馬音召之と見えり世は政事
 要略の維摩會條ある百濟禪尼法明トを引きて
 對馬音の據とせれども今傳ある本は就く閱せり
 法明尼が維摩經を誦ししふあれど對馬音といふ
 あり見えば貢銀記トと一比丘尼とのありき其名を
 記されば法明が傳へしとも定め難し或ハ初ト金信禮來ト
 留對馬國傳於吳音舉國學之因名曰對馬音ト
 鈔トとのイ

文教温故卷上終



